孤独な愛され女王蜂　3

孤独な愛され女王蜂　3

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19441364

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, ♡喘ぎ, オメガバース, もぶお兄さん×霊幻, エク霊, 濁点喘ぎ

誰得？俺得！なオメガバースパロです。オリジナル設定含みます。ヨシ霊ですがビッチ師匠総受けです。モブお兄さん（お姉さん）×師匠あります。今回は本番はエク霊です。濁点喘ぎあり。倫理がまたもやアレ。お好きな方はお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

孤独な愛され女王蜂　３

「……今日も遅かったな」
「門限は守ってんじゃんか」
家に戻ると、俺の彼氏の１人である医者のアルファが待ち構えていた。
「おかえり、俺のオメガ」
「ただいま、俺のアルファ」
俺たちは抱き合って口付ける。
「はー……また別のアルファのフェロモンをこんなに付けてきて」
彼氏はすりすりと自分のフェロモンを擦り込むように身体を擦り付けてくる。
風呂入ってきてるから、もう芹沢の匂いはしないはずだが、アルファの鼻には他のアルファの臭いはかなり微量でもにおうらしい。
「いい加減落ち着きなよ、新隆」
ぴく、と俺の頬が嫌な予感にひきつる。
「俺と結婚しよう。仕事なんか辞めてさ、俺の子供を産んで育ててくれよ」
あーあ。このアルファともこれで終わりかぁ。家事とか全部やってくれるから、便利で好きだったんだけどなー。
「は？仕事なんかって何？失礼じゃね？」
「だって、君が遊びでやってるだけだろう？僕の稼ぎだけで２人とも生きていけるんだからさ、君が働く必要ないだろ」
さっきから俺の地雷でよく踊ってくれるな、こいつ。
「俺はお前と結婚する気は無いって。最初に言ったじゃん、セフレでもいいなら付き合う、って。俺、お前以外にも彼氏がいるって言ってるだろ？」
「──は？まだ別れて無かったの？」
お互いのこめかみに青筋が浮かんでくる。
「なんで俺が他の彼氏と別れなきゃいけないんだよ」
「同棲までしといて、これだけ期待させといてそれはないだろ。両親になんて言えばいいんだよ、オメガ連れて行くって言っちゃった

んだぞ」
「そんなの知るかよ。適当なオメガ口説いて連れてけば？」
彼氏のこめかみの青筋が増える。
「おまえ本当にめちゃくちゃだな……！もうさ、そんなに俺のことが大事じゃ無いなら、別れた方がいいんじゃねぇの？」
お？お前から言ってくれる、助かるわー。別れ話って揉めるんだよな。
「じゃ、そうしようぜ。さよなら、元気でな」
俺はいつでもこの部屋から出れるようにまとめていた荷物のボストンバッグを肩に担いで、いくつかの私物を手に取ってドアに向かう。
「は？は？いやちょっ」
戸惑う３年付き合った彼氏の声をドアで遮って、俺は取り敢えず事務所の方に向かった。
（さてと、どうすっかなー）
残り２人の彼氏の家に転がり込んでもいいが、どうも２人とも束縛が激しい。すぐセフレから本命彼氏にしろ、と言ってきそうでめんどくさい。

彼氏から着信。着拒。

芹沢のアパートに転がり込むか？それはそれで危険な気がする……なんとなくだけど。

彼氏から怒涛のメール。「話し合おう」「俺が悪かった」「愛してる」「帰ってきてくれ」うわまだ来る……ウッザ。迷惑メールフィルターに登録。

しばらく新しいセフレを探しながら、ワンナイトでラブホを転々とするかなぁ。
「オイ。こんな時間に何してる」
と、思ってたら。お巡りさんに職質された。
「ヨシフさん」

俺を見張ってるらしいその坊主頭の目つきの悪い警官は、じろりと俺を睨みつけた。
「何企んでやがる？」
「いや別に……あ、そうだ。そうそう、企んでる。企んでるから、お巡りさんの家に泊めてよ」
「は！？」
「泊めてくれたら喋ってあげるぜ」
お巡りさんはかなり悩んでから、
「……来い」
泊めてくれるみたいだった。あー助かった。

※

生活感がまったく無い部屋だった。お巡りさんはここに暮らしてないのだろうか。まあ何でもいいけど。
「悪いけど明日も仕事あるから、俺寝るわな。お休みヨシフさん」
俺はさっさとスウェットに着替えてベッドに潜り込む。
「は！？いやまて企みってなんだ！！」
「ああ」
そういえばそんなこと言ってたっけ。
「同棲してた彼氏と別れて今日寝るところが無かったから、適当なアルファ引っ掛けようと企んでた」
「……なんだそりゃ！」
「企みには違いねーだろ？俺もう眠たいんだよ、話は明日の朝にしてくれ……それとも」
する、とスウェットのすそを捲り上げて白い腹を見せつけてやる。
「宿代に一発ヤらせてやろうか？もう夜遅いから今日は一回だけな」
「……っ何を馬鹿なことを……」
「ちんこ膨らましながら言っても説得力ねーぞ♡やあい♡ざぁこ♡ざこあるふぁ♡」
「これはお前のフェロモンのせいだ！！……ほんとお前絶対にしょっぴいてやるからな……おい、ソファーで寝ろよ、家主にソ

ファーで寝させる気か」
「えー？一緒に寝ればいいだろ、ほら来いよ」
「はぁ！？」
せまいシングルベッドの掛け布団をめくってヨシフさんを誘う。
「オメガと寝るとよく眠れんぜ？ほぉら……おいで……」
掛け布団の下からぶわりと香るフェロモンに、ぐうっとヨシフさんが唸る。
「ほら、あと一歩で、お前のオメガだ」
「！！」
殺し文句に一瞬理性を飛ばしたヨシフさんがおれをベッドに縫い止める。
「あん♡……いいよ、好きにして」
ヨシフさんは思わず首筋に顔をうずめて、荒々しく俺のスウェットの裾から手を差し入れてきた。
が。
「ち、くしょう……負けて、たまるか、よ……」
驚くべき鋼の理性でそろそろと手を抜いて、首筋から顔を上げた。
「おー、えらいえらい」
俺を押し倒した状態のまま固まってしまったヨシフさんをちょいっと押すと、どさっとベッドに倒れ伏す。
「じゃ、おやすみー」
俺はもうねむい。
「……寝れるかよ、こんなので……」
おっと、ご立派様が完全に起きちゃってるな。
「大丈夫、俺のフェロモンを深く吸って……ほら、安心して。お前のオメガはここにいるよ。お前の腕の中だ。愛してるよ、ヨシフさん。安心しておやすみ」
ちゅ、とヨシフさんのおでこに子供にするように唇を落としてやる。
「なん……だ、これ……」
麻酔薬でも打たれたみたいに、オメガフェロモンにあまり耐性が無いらしいヨシフさんは意識を落とす。
やれやれ。

俺もすぐに寝た。

※

朝起きると、ヨシフさんはもういなくて、この部屋の合鍵だけが置かれていた。
「……便利なものゲットしちゃった〜♪」
とはいえ、いつまでも警官の宿に転がり込んでる訳にもいかない。
早くまた同棲できるアルファを探さないと。
「こういうとこオメガは不便だよな……」
実は俺はちゃんと自分のアパートを持っている。が、オメガの一人暮らしなんてすぐバレて強盗や強姦魔のターゲットになってしまうのだ。
だからシェルターに入るかアルファと暮らすかしかない。
「シェルター、職場から遠いんだよなぁ」
ため息をつきながら俺は最近連絡を取ってなかった美容師のアルファにまずメールを送ってみる。
『またセックスしねぇ？』
朝メシ食べて携帯を見ると、返事が返ってきてた。
『いいよ〜』
『泊めて欲しいんだけど』
『あ、それは彼女いるから無理』
ちっ、こいつはダメか。となると、別のアルファを探さないとな……久しぶりに発展場行くか……。
ん？メールがまだ来てる。
『ねぇ会いたくなっちゃった』
『ごはんだけでも行こうよ』
うるせー、こっちは宿探しに真剣なんだよ！
無視してたら、メールはもう来なかった。

※

職場に行くとヨシフさんがいた。

……いやまぁいいけどさぁ。
「ここでしばらく働くことになった。よろしくな！」
爽やかな笑顔で別人みたいに振る舞うヨシフさんに芹沢は疑いの目を向け、モブは素直に挨拶している。トメちゃんもそうだ。エクボは嫌そうな顔をしていた。
あーそういう。そう言う手できますか、お巡りさん。
「そういうわけだから、みんな、仲良くな」
ほんとにもー、無い腹をさぐられんの不快だわー。
「あ」
俺はパソコンの予約表を確認して声を上げる。
「次の人、俺を指名だから全員外で適当に時間潰してて。男性恐怖症でもあるからエクボも外出てて」
「「はーい」」「はい」「はいよ」
霊体のエクボは一見関係なさそうだが、見える人だと怖がる。
「おい、何か連絡でもするのか」
はー、うるさいのが１人残ってる……。
「次のお客さんは、アルファに嫌な目に遭わされたオメガ女性なんだよ。オメガとしか怖くて話せない。俺みたいに商売やってるオメガは珍しいから、俺のところの常連なんだよ」
「……そんな需要もあるのか」
「結構そういう客多いぜ？アルファは何をしてくるか分からねぇからな、オメガの店主がいる所をみんな探すんだよ」
ま、俺のフェロモンにつられたアルファの方が客としては多いんだけどな。
「ほら、ヨシフさんも出た出た」
ヨシフさんを追い出したら、入れ替わりにその女性が入ってきた。アルファフェロモンが消えるのを外で待っていたのだろう。悪いことをした。
「あの、先生……また、アレが欲しくて」
「ええ、分かっていますとも」
線の細い、いかにもなオメガ女性は、ほっとした顔をする。
「先生のフェロモン、落ち着きます。今日も除霊もお願いします」
「……ええ、分かりました」

俺はまず机の上から、モブの汗を染み込ませた布が入っているお守りを取り出す。
かなり濃いアルファフェロモンが臭う、アルファ避けのお守りだ。
アルファは自分より圧倒的に強いアルファのお手つきのオメガは避ける習性がある。殺されかねないからだ。それを利用したお守りである。
「１０００円です」
「……前から思ってたんですけど、安すぎませんか、先生」
いやまあ材料のモブの汗はセックスん時にいくらでも採取できるから、原価めちゃくちゃ安いしな……。
「あはは、そうですかね。では悪霊を軽減しておきますので、施術室へどうぞ。ラベンダーのオイルで良かったですよね？」
「ええ、お願いします。今日もCコースで」
マッサージもオメガはそうそう気楽に行くことができない。だいたいマッサージ師はアルファだからだ。だから俺の相談所に来るオメガの人は、何も無くても呪術クラッシュをして欲しいという人が多い。
「ああ、気持ちいい……」
ほう、と安心した顔をして呪術クラッシュを受けるオメガ女性の顔を見ると、この仕事をやっていて良かったな、と思う。
オメガのちょっとしたシェルターになれれば。最近はそう思うことも増えた。
「ありがとうございました」
「いえいえ、お気をつけて」
「あの……」
顔を真っ赤にしてお客さんが俺にポストイットを差し出してくる。
「先生、良ければ今度お食事でもしませんか」
「……すみません、私、恋人がいるんです」
はっとお客さんが青ざめる。
「そ、そうですよね……ごめんなさい、忘れてください」
「分かりました。またのおこしをお待ちしております」
オメガ男性は、意外とオメガ女性や同じオメガ男性から声をかけられることが多い。

みんなアルファに嫌な目に遭わされてきてるから、癒しを同じオメガに求めるのだ。
ただ、非力なオメガ同士のカップルは犯罪者に狙われやすいから、俺はあんまり推奨していない。それなら適当なアルファとツガった方がマシというものである。世の中モブや芹沢みたいに、いいアルファも沢山いるのだし。……アルファ恐怖症になってしまった人には、無意味な言葉だけれども。

※

今日はエクボの日だ。
これまたオッサン同士、気楽なものである。
それに、エクボが借りてる身体はベータだ。フェロモンが効きすぎることはないから、それも気が楽でいい。俺を噛んだ時のモブのように、トリップ状態になることはまず無いのは助かる。
「ん……♡」
舌を絡み合わせてエクボの唾液を味わう。
男臭くて、気持ちいい。
ベータはベータでいいもんだ。たまにはアルファフェロモンが無いセックスも気持ち良くてイイ。
「シャワー先行ってくれよ」
「……なあ、たまには一緒に入らないか？」
俺は眉をひそめる。
「俺、嫌だって言ったよな？それ」
「……そうだったな。悪かった」
エクボがシャワーを浴びてる間に、ミネラルウォーターでヒート誘発剤を飲む。
入れ替わりでシャワーを浴びて。
ひーとっ♡♡♡
キマってきたあっ♡♡♡
「えくぼぉっ♡♡♡はやくヤろうっ♡♡♡」
「なんだ、またラリってんのかよ……たまにはヒートになってないお前を抱きたいもんだな」

どうでもいいっ♡ぜんぶどうでもいいっ……♡
「一回イってくれねぇか？お前のケツマン、ふわふわになっから
さ」
「わかっ♡わかったぁっ♡」
……えっ？なんでちんこいじるのじゃまするのぉっ♡
「やだぁ、えくぼいじわるうっ♡」
「せっかくバイブがあるんだ。使ってみようぜ」
にせちんこじゃんっ♡そんなのいらな……
「あぁああああっ♡♡♡」
ぜんりつせんっ♡どちゅどちゅやめてぇっ♡♡♡
「ほら、振動させてみるぞ」
「……！やめっ……♡」
かち、って音がして、
「んあ゛あ゛あ゛あ゛あ゛っ♡♡♡」
わ、わけわかんなっ、わけわかんないっ♡
「もうイったぁっ♡もうオモチャやだぁっ♡イくイくイくっ、また
イ……っ♡♡♡」
ぶるぶるがっ♡メススイッチつぶしてっ♡やだぁ……っ♡
「おー、イイ感じに出来上がったな」
！！♡
「いまやだっ♡いまチンポやだっ♡♡♡」
「ハート飛ばしながら何言ってんだよ。オラ、大好きなチンポだ、
とくと味わえっ！」
ずどん、って犯されて、
「ん゛お゛っっっっ♡」
トコロテン、したぁ……っ♡
「これしゅき、エクボチンポすきぃ……っ♡」
どちゅどちゅぎもぢいいれすぅっ♡
「そーだな、お前俺様のこと大好きだもんなー」
「うんっ♡エクボ好きぃ……っ♡」
あ♡あ♡あ♡はげし、くなったぁっ♡♡
「霊幻」
「はいっ♡」

イく、イくぅ……っ♡
「愛してる」
「うんっ♡おれ、おれもぉっ♡♡」
なんだよ♡
そんな顔して、イくなよぉ……♡♡♡
「イっ、～～～～っ♡♡♡♡」
あぁああぁっ♡♡♡♡

「なあ霊幻……オメガ性なんてない俺様がお前に服従してる意味、
よーく考えた方がいいぜ」

あー、えくぼ、愛してるぅっ♡♡♡

続